慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	建部遯吾の社会学構想 : 近代日本社会学のひとつの底流
Sub Title	Takebe Tongo's sociological conception : an undercurrent under the development of modern Japanese sociology
Author	川合, 隆男(Kawai, Takao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1999
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.72, No.5 (1999. 5) ,p.1- 35
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19990528-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

建部遯吾の社会学構想

――近代日本社会学のひとつの底流――

川合隆男

一、はじめに
二、建部の社会学構想
三、『普通社会学』の体系と建部社会学の特徴
四、「日本社会学院」の主宰
五、むすび

一、はじめに

幕末・明治維新から明治・大正・昭和戦前期にかけての歴史の大きな激動のなかで、「狭い」世間や「広い」世間に生きつつも、「世の中」や「国」、「文明」や「世界」の来し方行く末を定め難くも感じ取り想い描き、人間と人間との関係を新たに模索し始める過程でひとつの複合した学問運動として展開されていった「人間学」

「世態学」「社会学」の歩みを、建部遯吾（たけべとんご）（一八七一―一九四五、明治四―昭和二〇）の社会学構想の検討を通じて再考察したいというのが本稿の意図である。

広く社会学史を考えていくうえでの論点およびアプローチとして、(1)社会思想ないし社会学思想、社会学説、社会学上の理論的パースペクティブを基本的な論点として社会学史研究を進めようとする試み、(2)人々の生活、社会問題、社会観察・社会調査、社会学理論、政策的課題等の相互の関連に主な焦点をあてる試み、(3)家族、地域社会、労働・職業・産業、政治、階級・階層、宗教、マス・コミュニケーション、男性と女性、環境問題、社会福祉等々の社会学の個別専門領域を対象にして社会学史を構成しようとするもの、(4)社会学を中心とした学問運動・活動の組織化、制度化に焦点をあてる試み、(5)社会学の学問運動・活動を担った個々の人々の社会学上の特徴、足跡、生涯、生活史との関連に重点をおきつつ社会学史の展開を跡づけようとするもの、などに分けてそれぞれを個々に考察していくこともできるし、それらを相互に関連づけていくこともできる。ここでは特に(1)と(5)に関連づけて、建部遯吾の社会学構想の展開とその特徴を検討していきたい。

更に、近代日本社会学の社会思想、社会学思想の展開過程の中で明治初年から三〇年代期までの社会学の草創期、形成期はむしろ多様な動きとして次のような動きが注目される。

(a) 福沢諭吉、J・S・ミル、H・スペンサーなどの哲学思想・社会思想・社会学思想にみる近代自然法思想、自由主義、社会進化論の系譜

(b) 西周、フェノロサ、外山正一、有賀長雄、加藤弘之、建部遯吾などにみる社会進化論、社会（国家）有機体論、講壇社会学の系譜

(c) 片山潜、安部磯雄、浮田和民、岸本能武太、布川孫市、高木正義などキリスト教関係者などによる社会運動、社会改良・社会事業との関連にみる系譜

(d) 松原岩五郎、横山源之助、杉享二、呉文聡など民間在野のジャーナリスト、一部の行政官僚による社会観察、社会統計事業などにみる経験的社会論、経験的社会学の系譜などである。[1]

建部の社会学構想は、明らかに(b)の社会進化論、社会（国家）有機体論、講壇社会学の系譜に位置づけられるものといえる。そして一般に広く共有される観点でもあるが、わたしたちの生活・意識・思想等の形成にしろ、学問運動としての社会学の生成と展開、社会学の構想にしろ、内外に交錯する文化接触論の観点からの接近が必要である。在来的・内生的要因（その特徴と存続、批判的継承と革新等）と外来的・外生的要因（西洋文化、西洋の学問の受容、摂取等）との相克という観点である。「新学」と「旧学」との相克・交錯、社会学の生成・展開も、(1)在来の広い意味での社会観、(2)それらを支えてきた社会的諸条件の変化、(3)外来文化の影響、(4)新たな社会観の形成、新たな学問運動など、の相互の葛藤、相克のうちに試みられていくと考えるべきである。[2]

社会学の歩みを再考察するうえで考慮されるべき観点は、時間軸に関するものである。短期的（微視的）な特徴づけと長期的（巨視的）な特徴づけである。高田保馬「日本に於ける社会学の発達」（一九三三年）の第一期（草創の時期）、第二期（社会有機体説の時期）、第三期（心理学的社会学の時期）、第四期（形式社会学の時期）、第五期（文化社会学の時期）などの特徴[3]は、前者の短期的な特徴づけの例であり、福武直「日本社会学」（一九五七年）における「日本社会学の創成」、「日本社会学の転換」、「日本社会学の発展」などの区分[4]は、相対して後者の長期的な特徴づけといえるだろう。本稿では建部遯吾の社会学構想を近代日本社会学のひとつの底流として、明治・大正・昭和戦前期を特徴づける長期的な胎動として批判的に再考察していきたい。

建部は一九〇一（明治三四）年に東京帝国大学の社会学の教授となり一九二二（大正一一）年に東京帝大を辞任するに至る迄、日本社会学界の中心的な存在であった。しかし、「カント、コムト、及び遯吾を以て三大思想家とす」、「社会学はコムトに創り、遯吾において大成す」と壮言したという建部の名前があげられるとしても、

建部の社会学についての言及や研究は極めて限定されたものであった。戦前期の学史研究においても、また戦後期の社会学史研究においてもそうした傾向が強いように思われる。何故なのだろうか。

戦前期の学史研究において建部の社会学に関する評価の代表的な例として挙げられるのは、松本潤一郎「日本社会学の沿革と展望」[5]（一九三二年）であろう。松本は、かって建部の指導下にあった学生でもあったが、建部社会学を検討して「反対に最も惜しまれるることは博士の体系が余りにも早く完成に持ち来された（ママ）ことである。それは固定化を致し、新世紀の新興への適応性を著しく低下したのである。仍て博士の整頓した体系的殿堂の前に、多数の初学者が萎縮し教義として博士の学説を受け入れる以外に出でなかったことは、社会学の発達を決して促進せしめるものでは無かった。[6]」としていた。

戦後においてもそのような評価は基本的に踏襲されている。ただし、林恵海が建部の功績として、建部社会学が官辺に安心感を与え一般に社会学への圧迫を脱せしめたこと、大正二年「日本社会学院」を創立主宰し、全日本の斯学研究家を大同結集して社会学の発達と普及に貢献したとする評価が他方になされたことは注目しておいてよい。[7]しかし、「彼の社会学は大正期に至ってはすでに過去のものとなり、日本社会学院も彼の退職後解体して日本社会学会に変化したし、育成した門弟の中からもその正統的継承者をほとんど出さなかった。その意味においても日本社会学創成期最後の学者であったのである」とする福武直の評価[8]の例にみるように、むしろ批判的・否定的評価が強められた。「その学問構成は科学的厳密さを欠き、間々哲学的思弁に堕するものを含んでいた」、「学問的にこれが社会学の発展に寄与することなく」（新明正道、一九五四年、一九七七年）、「建部は明治後期の明治憲法体制とナショナリズムの時代を背景にして日本主義・東洋主義の立場をとった」（富永健一、一九九五年）などの評価も同様である。[9]

近代日本社会学史研究のうえで秀れた業績である秋元律郎『日本社会学史――形成過程と思想構造――』（一

九七九)、河村望『日本社会学史研究(上・下)』(一九七三年)、斉藤正二『日本社会学成立史の研究』(一九七六年)、大道安次郎『日本社会学の形成――九人の開拓者たち――』(一九六八年)等においても、建部の社会学を日本社会学の成立期・確立期、明治後期・大正前期に位置づけて批判的な考察を展開してきている。[10]

ここでは、建部遯吾の社会学構想と題して、明治・大正・昭和戦前期という長期的な社会学の特徴づけの視点から(i)建部社会学はどのようにして構想されていったのか、(ii)その内容の検討、(iii)はたして「彼の社会学は大正期に至ってはすでに過去のものとなり」「日本の社会学の発展に全く影響するところがなかった」のか、を順次再考察していきたい。

二、建部の社会学構想

建部遯吾の社会学については彼の著作『普通社会学』(第一巻―第四巻)(一九〇四―一九一八年)によって知られてはいるが、彼の社会学がどのようにして構想されていき、彼の生涯にわたる活動や社会学の内容とその展開について、更に「すでに過去のもの」とされた彼の社会学がその後どのような影響をもたらしていったのか、についての検討はこれまで必ずしも充分になされてこなかったように考えられる。そこで、まず、(a)建部遯吾の生涯、(b)建部の社会学構想に言及するところから始めていきたい。

(a) 建部遯吾の生涯

一八七一(明治四)年三月二一日、新潟県中蒲原郡横越村で父建部貞夫(蔵軒)、母春茂の五男として生まれた。建部家は小林家と交代で代々新発田藩横越組の大庄屋をつとめてきた旧家であった。横越村は、旧新発田藩

領であり、阿賀野川の流域にあり蒲原平野の村である。父貞夫は儒学の素養が深く儒家として子弟の訓育には格別厳格だったらしく、毎日夕食時に遯吾らを座らせて何かと訓戒するのが常であったという。後年に遯吾が父の遺稿としてまとめた『蔵軒存稿』には「遯吾の童時、常の誠は、書史に親しみ実力を養はば詩文は自ら其裡に在り、と云うにありき」や「蔵軒家則」のひとつとして「凡一家の経紀は貴賤大小となく毅然たる家則を立て固く執らさるへからず。……人は各家々の歴史ありて今日に至れるものなれば、必ずしも範を他に取らす、又俗論に雷同せす、自機宜を制せんことを要す。」などが書き残されている。(11)

遯吾は、横越小学校、横越高等小学校を卒業後、地元の小学校で代用教員（授業生）をつとめた後に村の豪農らの育英資金等の支援を得て、一八八八年四月に上京（一八歳）。私立東京専門学校、私立国民英学会、私立東京物理学校、私立東京三語学校、私立大成学館などに通って物理学、語学、数学などを勉学した。一八九三年七月第一高等中学校（旧一高）を卒業後、ただちに東京帝国大学文科大学哲学科に入学（遯吾二三歳）。入学した当時の同輩に高山林次郎（樗牛）、姉崎正治、桑木厳翼などがいた。建部はもともと儒学の素養もあったが、勉強家で在学中から「易論」や「支那思想」に関する論稿を書いて『六合雑誌』などに載せたりしていた。

建部の青年期・学生時代の日本は、列強諸国に伍さんとして国家体制の樹立を図り急速に国家主義・帝国主義の道を歩もうとしていた。日清戦争に直面し、多くの社会問題が噴出し新たな労働運動が台頭しつつあった。一八九六年帝国大学文科大学哲学科を卒業（二六歳）、大学院に進学して外山正一のもとで社会学を研究し始める。ところが、一八九七年一一月に外山正一が東京帝国大学総長になることになり、社会学講座を急遽に米国留学より帰国間もない高木正義(12)（一八九七年一二月―一九〇一年七月まで社会学講師）と建部遯吾の二人が社会学講師として分担することになる。一八九八年六月社会学研究のために三年間ドイツ留学を命じられ、同年八月に海外留学のために渡航する。渡航前に『陸象山』（一八九七年七月刊）、『哲学大観』（一八九八年四月刊）をすでに出版し

ているが、学生時代、大学院在学中からすでに用意され執筆されていたものと思われる。

海外留学中の一九〇〇年六月に帝国大学文科大学助教授に任ぜられ、帰国した一九〇一年一〇月に同教授となった。一九〇三年三月に文科大学に「社会学研究室」を設置、同年六月には「日露開戦建白書を桂総理、小村外相、寺内陸軍、山本海軍、曾禰大蔵五大臣に提出」。日露戦争当時には主戦論や非戦論が渦巻くなかで、戸水寛人、金井延、中村進午、富井政章、寺尾亨、高橋作衛、小野塚喜平次の東大の七博士に加えて建部遯吾も主戦論を唱えるなど、建部は終始持論家、経綸家として絶えず言論活動、執筆活動を続けた。その後、一九一三（大正二）年の「日本社会学院」の創立には京都帝大の米田庄太郎らとともにその中心となって主宰していった。建部は、この全国的な学会の組織者、主宰者であり、『日本社会学院年報』の刊行、学院の「調査部」による『現代社会問題研究』叢書（全二五巻）の刊行においても中心的な推進者であった。東京帝国大学文学部社会学科の社会学専攻の増加の時勢に対応して社会学講座増設を建部は強く主張していたが、入れられずに、戸田貞三が海外留学から帰国してくるのと相前後して、建部は一九二二年九月五日に「病弱重任に堪えられず」教授を辞して「依願免本官」となる。

建部は早くより政治的提言や参画にも強い意欲を示していたが、一九二三年一二月の衆議院議員の補欠選挙で郷里の新潟県第六区で立候補して憲政会代議士として当選して二期代議士をつとめた。一九二七年八月には帝国議会代議員としてパリの万国議院連合第二四大会に出席し演説。一九二八年に政治家から離脱したが、一九三八年一二月には貴族院議員に勅選補充され任ぜられた。彼が生涯よく過ごした生家の土蔵の書斎の机の上に乃木希典将軍の胸像の石膏像をおいて、晩年には『興亜の理想及び経綸』（一九四三年）を著して、忠君愛国主義、強国主義と聖戦の完遂を主張していたが、終戦に先立って、戦下の一九四五年二月一八日東京千駄ヶ谷の自宅で七五年の生涯を閉じた。建部遯吾の著作は、『普通社会学』をはじめ膨大なものがある。(13)

(b) 建部の社会学構想

建部は自らの雅号を「水城」「水城学人」とも称した。数多く著作をなしたが、その各著書の巻末に「自彊録」として自らの著作目録を附している。建部の社会学構想の展開を辿り明らかにしていくには、彼の著作の流れに沿っていくのがひとつの方法でもある。

儒家に生まれ育ち、青年期より支那思想や儒学に親しんでいたところから、建部の社会学構想の基礎は明らかに儒学にあったといえる。『陸象山』（一八九七年）は、建部が東京帝大文科大学哲学科在学中に執筆をはじめ大学院に在籍して研究をしていた時期に書かれたものである。これは、中国、南宋の哲学者・思想家で朱子と並び称された陸九淵（象山、一一三九―一一九二年）を取り上げたもので、陸象山を中心にして支那思想の性質とその展開を考究したものであり、建部の学生時代の猛烈な勉学と陸象山、儒学への傾倒振りとを示している。建部は本書を通じて「直裁簡易を以て学問の主旨と為し実践躬行を以て学者の体面を為す」[14] 陸象山の哲学思想から学び取ろうとする。象山の綱領を自ら要約している中に「学問即ち儒学の目的は自個を進捗し天下を進捗するに在り、而して終に天地の化育に参賛するは其位に在る者当然の務なりとす。」、「方今天下の勢、殊に這般の英気を要す、学者は決して空学死学に陥るべからずして大に実学活学を講ずるを要す。」など後の建部の学問姿勢を示唆する特徴に着目している。

学問の進程について、「第一、大極を弁して個我衆我宇宙を覚る」、「第二、之を解して理となし、其の吾人が取り扱い得べき者なるを覚る」、「第三、之を心に約して彼等を覚るの即ち自ら覚るに在るを覚る」、「第四、個我の進捗し得べき所以を本つけて性を覚る」、「第五、進捗の程度の千差万別を本つけて習を覚る」、「第六、工夫を以て進捗の実現を覚る」、「第七、実践を以て既に立ち既に惑わざるを覚る」と象山を特徴づけている。[15]

更に、「理」について、理は(i)万象は恒常なり、之を名つけて理と言う、(ii)理は宇宙に遍満なり、人も亦固よ

り免れず、(iii)宇宙事物の運行秩然として序あるが如く、人の行為も亦一定の行うべき所為すべき所に適うを要す、とその意義を明らかにし、[16]「国家の成るは勢なり、国家の継在運進する所以亦勢に由ることなくんばあらず、而して此勢を制して理に向はしむるは即ち先覚者たる君の事即ち政治なり」とし、「理は理想なり、勢は見在なり、見在や理想や之を活動の意味に用いるに於いて理勢となる」[17]とする。ここに陸象山の哲学思想、儒学思想を基礎とする建部遯吾の学問姿勢の萌芽を読みとることができる。

『哲学大観』（一八九八年）も文科大学哲学科を卒業の頃から大学院時代にかけての著書である。支那思想や支那の教学、日本の思潮を含めて洋の東西、古今の哲学思想を縦横に大胆に論じたものである。ここでも陸象山の儒学思想と王陽明の知行合一説を根本にして、「ヘェゲル、ルッソオ、コムト、スペンサル、ギッディングス」などにも触れ、人間思想の開展・変遷推移・進歩を儒学の弁証法的推移とコントの発展段階にならい第一を「独断」の段階、第二を「懐疑」の段階、第三を「攻覈」「討究的若しくは合成的建設的の時期」を設定して、建部は彼の社会学研究を第三の時期を支える学問体系、実践として位置づけて社会学を構想していくことになる（**図表1**参照）。「社会学は根本的学問なり、渾一的学問なり、実地的学問なり、理想的学問なり、主義其者の批評吟味を遂行する学問なり、儒学は古代に於ける斯学にして、斯学は新時代に於ける儒学ならんとす」[18]という。「旧学」としての儒学を新たに「新学」「社会学」に継承しようとする。

図表1

宇宙進化
- 物的進化
  - 星學的進化
  - 地質學的進化
  - 生物學的進化
- 人的進化
  - 社會學的進化

意識の開展
- 生物學的進化
  - 寫表の時期
  - 自覺の時期
- 社會學的進化
  - 思想の時期

思想の開展

實質上の開展	第一原理	信仰	所應	形式上の開展
自然觀察の時期	唯物的	多神的	寫表期	獨斷の時期
人間攷察の時期	唯心的	一神的	自覺期	懷疑の時期
宇宙攷覈の時期	合一的	凡神的	思想期	攷覈の時期

（建部遯吾『哲学大観』一八九八年、四六―四七頁）

A・コントについてはこの『哲学大観』のなかで関心は寄せられているが、まだ特別に注目されているわけではない。コントが思想界においてしめる重要な功績として、（一）「学問の統一を唱説し学問の目的は社会人生の理想の研覈に他ならずして学問の面目は一切の迷忘を離れ堅確なる事実の上に理論の構成を樹立せる知識の体系に他ならざるを立説せり」こと、（二）「宇宙を達観するの識力を以て宏大通達なる規模を以て学問の斯問題の闡明に竭力し数学、星学、化学、物理学及生物学の原理を研覈して終に社会学を構成し、這般六部の体系的到達を以て其積極哲学の全系を」なすとしていることをあげている。後にコントの実証哲学大系として広く紹介されることになるものを、ここでは「積極哲学の全系」として注意が向けられていることも興味深い。建部は、二〇世紀を目前にして「第二〇世紀の新気運は必ずや尤も厳粛なる意義に於ける社会的問題の解釈を要求すべく、乃ち所謂国家体制の事項は亦先つ其問題の包含中に入り来るべく、倫理的教化の問題は次いで亦必然其問題の包含中に入り来るべく、国際的文明進歩の問題は最後に亦必然其問題の包含中に入り来るべく」、「這般根本的渾一的攻究の一大事攻は所謂社会学の名目の下に統属せしむるを致すべし」[19]としている。ここに建部の学問形成が社会学を軸に構想されて動き出しているのを知ることができる。

コントについては「コムト　一七九八―一八五七　Auguste Comte は社会学的研究の先達。Cours de Philosophie Positive の大著あり。」「積極哲学系　コムト著」とあり、また「付録」のところで「明治思想の変遷」をあつかい、福沢諭吉を専ら英国流の実利主義に拠り物質的功利の主義を以て社会改善の方針としているが、はたしてそれを日本萬世の思想主義と為すべき必然性があるのかと批判している。

刊行の年次からいえば少し後になるが、『静観余録』（一九〇七年）に収められている「静観記」「生生談」などは先の『陸象山』『哲学大観』の執筆の時期に並行して書かれていたものと思われる。「人生は実在なり、進歩の連続なり、力行の連続なり。吾人は学問せざるべからず。学問の目的は進歩を力行するに在り、是故に吾人は学

問を分かち二種類とするを得べし、一は理想の進歩を企画する者なり、他は実現の進歩を企画する者なり」。「政治家と学者とは全然種類を異にする者なりとは近世の西洋学術に伴う文明一時の変調より生ぜる妄説なれども、実際は正に之と反対にして大政治家は毎に大学者たり、且今世紀の下半に至りて時勢着々予告する第二〇世紀の文明の趨勢に於いては益々政治家と学者との合一を要する様子確かなり」と書き記していた。[20] 建部のこれから後の人生の軌跡を予見的に模索していたとも思える。

一八九八（明治三一）年八月、「水城生社会学研究の為満三年間海外留学の官命」を受けて旅立つ（「同人に留別す」『西遊漫筆』一九〇三年）。海外留学中はドイツ・ベルリン大学、更にはパリを拠点にしつつ、学位論文（『普通社会学』体系に連なるもの）を準備完成して日本に郵送している。さらにヨーロッパ各国、露国、北アメリカを巡遊し政情・教育事情視察などをして帰国している。[21]

『普通社会学』（全四巻、一九〇四―一九一八年）の巻末には、それぞれにフランス語で内容構成を付してあるが、この構成と全く同じものを、すでにフランスの社会学雑誌 Revue Internationale de Sociologie, 1900, 164-177 に留学中にすでに発表していたことは興味深い。海外留学中に学位論文として書き上げられていたものを日本に帰国したから、『普通社会学』（第一巻、社会学序説、一九〇四年）を皮切りに以後一四年をかけて公刊していく建部の持続したエネルギーには驚かされる。また、この『西遊漫筆』で「実理主義」の用語が使われており、「露国雑感」の中に「今日の世界は未だ覇者将軍家の一定せざる混沌の封建時代に有之候。かの帝国主義なる者、亦唯この時運の現況の自覚たるに過ぎず」とし、また「約言すれば所謂積極論者はいづれの道にも決戦論者たらざる可からざる道理に候」とも述べていた。

一九〇三（明治三三）年の建部の『外政時言』は、折しも東京帝大七博士らの対露強硬論の発表や戸水事件等と同じ年の刊行であり、そこに収められている「露国雑感」（一九〇一年七月）、「国際競争と帝国主義」（一九〇三

年一月）、「帝国外交の将来」（一九〇三年三月）、「国民的大理想と露西亜」（一九〇三年四月）、「満州問題の処決」（一九〇三年七月）など、いずれも、すでに朝鮮・満州・露西亜などへの対強硬路線、帝国の外伸、民族発展などが主張されていた。

三、『普通社会学』の体系と建部社会学の特徴

建部の著作は膨大なものであるが、主著はすべて公刊が完結するまで一四年を費やした『普通社会学』（全四巻）であった。ここでは、(a)『普通社会学』の体系、(b)建部社会学の特徴について検討する。

(a)『普通社会学』の体系

この『普通社会学』の執筆の経緯からみていくことにしよう。執筆の時期は先に触れた『陸象山』『哲学大観』の内容に照らしも、大学院に入学して自らの研究題目を社会学と定めて研究を本格的に開始して、一八九八（明治三一）年八月に三か年の海外留学に出発する迄の時期（二六―二八歳）の間に、彼の社会学大系の骨格がほぼ出来上がっていたものと思われる。そして、海外留学の地、ドイツ、フランスを中心にその内容を検討して書き加えていき、まずは学位論文として一九〇〇年に日本に送られて提出された。海外留学中に実に数多くの文献を渉猟して参照してはいるが、論文の骨格と内容は大きく変わることはなかったのではないだろうか。一九〇一年一〇月に帰国して、一九〇二年一月に文学博士の学位を授与されている。恩師の外山正一は東京帝国大学総長、文部大臣を歴任して、一九〇〇年三月に死去していた。

大学院に入って彼の研究テーマをめぐって指導教授外山正一とのやりとりが、『普通社会学』の第一巻・社会

学序説のはじめに「本著述の由来を詳にす」として記されている。外山が「科目の広大に失するなきを得じ、社会学科中某事項を選定すること尤も適当と為すべし」としたのに対して、建部は「社会学や、既に文科大学の学程に於いて二年間一定して整然たるなく、問題の確立して答解を促すなし。乃ち今や社会学の研究は、社会学其者の全般的基礎的研究より始むるを要す」、「全般的研究に由りて斯学の成形一たび完きを得る、部分的研究は当然之に次ぎて成さるべき者」として、この『普通社会学』の著述に取り組んでいった。(22)

このようにして「本著普通社会学、凡て四巻一二篇三五章二三六節、社会学の全般的基礎的研究」として順を追って刊行されていった。建部の社会学体系そのもはある意味で広大無限ともいえようが、「普通社会学」La sociologie generale は左記の四部より構成されるという。

第一部　序説　Les prolégomènes
第二部　社会理学　La logique sociale
第三部　社会静学　La statique sociale
第四部　社会動学　La dynamique sociale

「第一部　序説」は『普通社会学・第一巻・社会学序説』として、まず最初に一九〇四年に刊行され、以後着実に発刊されていったが、建部の研究に言及した論文や研究書のなかに『理論普通社会学』（全四巻）としていることがあったりする。これは明らかに間違いであり、直接に原著に触れれば、明らかである。建部に『理論普通社会学綱領』（一九〇四年九月、金港堂）という著書があるが、こちらは「予が著普通社会学に進む」入門書として書かれた小冊子である。

『普通社会学・第一巻・社会学序説』は、「第一篇　総論」（社会、社会学、問題及体系、研究法）、「第二篇　史論」（汎論、社会学の源流、社会学の形成、社会学の将来）より構成されている。「社会は渾一体」であり、「社会は

有機体なり」。「人生は知行の連続なり」「知を呼びて理想となし、行を呼びて実現となす」、「学問の目的は人生に於ける進歩」なり、「学問の方法に三段の種別あり、第一種を独断的方法とし、第二種を懐疑的方法とし、而して第三種を批評的方法とす」として、コントの分類法に習っている。しかし、「第三、批評的方法は、思想及事物の実理に照準して、思想及事物を批評し、以て実理的知識を結果する者なり」「名つけて実理的方法と謂うを得べし」として、建部は明確に実理的方法という用語を用い始めている。[23] 学問には体統があり、社会学は「人生と社会との相関の研究なり」、「尤も含蓄的意味に於ける人生の学問なり」、「最高の学問なり究竟的学問なり」。社会主義の興起、自然科学の進歩、哲学の進歩、史学の進歩、経済学の進歩、政法の学の進歩、オオギュスト・コントの社会学等のもとで、建部のこれまでの儒学思想や哲学思想を軸とした学問形成が、新たに「普通社会学」体系として展開されていく。

『普通社会学・第二巻・社会理学』（一九〇五年）は、社会は如何にして実在するのかを取り扱っている。「第一篇　普遍原理」（宇宙、人、理法）、「第二篇　普遍原則」（存在、進化）、「第三篇　特殊原理」（社会の要素、社会の規定、社会の動因）、「第四篇　特殊原則」（社会の成立、社会の発達）よりなっている。ここでは、広く宇宙、人、社会との関係が外的に内的に縦横に社会実在論、社会実体論として論じられている。「理法とは万象内外の相関に於ける恒常の規定なり。理法は普遍なり、必然なり」という考えに基づいて、渾一的実在としての社会の要素、規定、動因、成立、発達についての根本的抽象的な説明を試みている。

『普通社会学・第三巻・社会静学』（一九〇九年）は、社会は如何にあるのか、「社会の現象如何を究明する」「社会静学」「社会現象論」である。「社会静学は社会の見在の説明なり、実地に於ける社会の現象の論理的方法的究明叙述なり」「具象的知識」である。この巻の構成は、「第一篇　社会発生論」（自然社会の発生、人意社会の発生）、「第二篇　社会体制論」（家族体制、国家体制、国際体制）、「第三篇　社会運営論」（経済、教化、政治）であ

る。社会静学、社会動学の分類名称はコントやスペンサー、ウォードなどの分類名称に倣ったものであろう。

現実の社会に関わってくるだけに、「婦人は社会の各個単位の内に主として働き、男子は社会の単位以外に主として働き、婦人は間接に、男子は直接に、社会の裏に働く者と謂うべし」、社会体制としての「家族体制、国家体制、国際体制」の位置づけ、「文明の発展は唯戦争を進化せしむるの効あり」など建部の現実的な考えを表している具体的記述も多い。社会制度の運営にかかわる第三篇の社会運営論では、経済、「教化」、政治を置いて論じているところも建部の考えを示していて興味深い。「教化とは、自然的状態に於ける人を化して、社会の成分たるに適応する人格を有するに至らしむる所以の社会運営の謂なり、」「政治は統治の体制を有する社会即ち国家が統治の主体として為す一切の運営の謂なり」として建部が重視していたところである。

『普通社会学・第四巻・社会動学』（一九一八年）も建部社会学の本領を示している。建部によると、社会学の三大部門は、社会理学、社会静学、そして社会動学であり、この社会動学は社会の運命の問題を扱う。それは、「如何にあらんとするのかの問題」と「如何にあらしむべきかの問題」、別に言い換えれば「変遷進動の勢」と「変遷進動の理」、さらに言い換えれば「社会進化論」と「社会理想論」とを論じるものである。ここでも、前節でみたように、陸象山や儒学思想の「理」と「勢」の考え方が脈々と継承展開されている。

第四巻は「第一篇　社会進化論」（社会進化の要義、社会進化の方式、社会進化の実質）、「第二篇　社会理想論」（理想汎論、個人的理想、社会的理想）、「第三篇　文明論」（文明汎論、社会進化の史観、文明の概評）よりなっている。知行合一論の立場から、万象経常の「理法」、「現象」、「勢」、「理（理想）」とを結びつけていこうとする。これを建部は社会学的史観、自由史観と名づけている。ここでは、しばしば社会進化、人間思想開展の三分類・三期・三段階、即ち「独断の時期、懐疑の時期、攻覈（批判的方法）の時期」を基軸にして、「個人的理想」と「社会的理想」を問い、「個人的理想は即ち亦この社会的理想の一方面一部局を形成する者なることを確認すべ

し」として、社会の根本理想として大観主義、実理主義、社会本位主義等を挙げている。また、第三篇の文明論のところで、社会進化の史観として人口の増殖、交通発展の漸勢、世界交通などに触れ、文明の概評として東西文明の価値を論じ「今や大成時代に進める我日本」の「教化、政治、国際関係一切の方面に於いて」「先進者」としての歩みを方向づけようとしている。

(b) 建部社会学の特徴

以上のように、建部の社会学構想に基づく普通社会学の体系は、第一巻・社会学序説、第二巻・社会理学、第三巻・社会静学、第四巻・社会動学と膨大なものである。宇宙論から始まり、「社会は渾一体」であり、「人生と社会との相関」を研究するのが社会学であり、社会理学は社会実在論を、社会静学は社会現象論を、社会動学は社会進化論と社会理想論を扱うという壮大な普通・一般社会学の提唱である。近代日本社会学史の中で総合社会学の立場から「普通社会学」、一般社会学の体系書を一四年という長い年月をかけて公刊していったのは類を見ない。やがて、高田保馬による『社会学原理』（一九一九年）など日本社会学史上の金字塔ともいうべき体系書が生まれるが、それ以前にこれだけの体系書が建部によって書かれていたという事実は、その内容の評価はともかくとして、建部の大きな功績として認めなければならないであろう。したがって、建部の功績は、林恵海が挙げた（一）建部社会学が官辺に安心感を与え、一般に社会学への圧迫を脱せしめたこと、（二）「日本社会学院」を創立し、研究者を大同結集し社会学の発達と普及に貢献したこと、に留まらない。

次に建部社会学の特徴を要約して述べていくことにする。

(i) 建部の社会学構想と社会学の体系化は、建部自身の儒学への強い関心、父蔵軒の儒家の家に生まれ育ち、支那思想、儒学思想を学び研究したことがその根本的な基礎になっている。特に、東京帝国大学文科大学哲学科及

び同大学院に在学中という青年期に早くも『陸象山』『哲学大観』の著作を通じて彼の哲学思想、社会学思想の根本が形成されていったことが特徴的である。「直裁簡易」「実践躬行」、知行合一、「理法」、「理」、「勢」などの考え方が彼の思想の骨格となり、当時に彼が接し得たコントをはじめとして多くの哲学思想、社会学思想に沿って（その形式に沿って）、社会学の体系化を図っていったものと思われる。大町桂月は建部を評して「惜しいことには自我の城壁があまりにも堅く、常に好んで勇ましく一騎打ちの戦闘をする人である」としていた。(24)

(ii) 建部の社会学構想と社会学の体系化を検討するうえで、当時の歴史的社会的な状況と動静、思想的な動向等にも関心を向けなければならないだろう。コントとも重なるが、そうした歴史的背景のもとでの人間思想の開展に関わる三つの時期・段階は先の「勢」と「理」との合一を図ろうとする意図であり、社会静学と社会動学との総合化の試みである。明治二〇年代・三〇年代は、文明開化が進展し資本主義経済化が本格化し、列強諸国に伍して帝国主義を樹立していこうとしていく時期であり、さまざまな社会問題が出現し労働運動や社会主義運動、宗教運動なども台頭し、日清、日露の戦争に直面していった時期でもあった。思想界も複雑に競合・混沌・混迷し、洋才と和魂、洋学・和学・儒学、国際主義・国家主義・日本主義、進歩主義・復古主義、東西の文明主義、社会主義や人道主義、やがて大正期を迎えて個人主義やデモクラシー等が渦巻いていく動きの中で、日本の歴史的な命運についての痛烈な危機意識、列強帝国との強い競争意識をもっていたのではなかろうか。

(iii) 建部はコントの positif, positivisme を「実証的」「実証主義」とはせずに「実理的」「実理主義」とすることに徹した。建部はむしろ儒学思想の伝統に依拠して、即ち、程子、陸象山、山鹿素行、佐久間象山、内田正雄編修・奥地誌略等の用法に典拠して「実理的」の用法こそ適しいとする。「コムトの所謂 Positive は明に東洋従来の健全なる思想の正徑に在りて脈々として伝承相継ぎたる実理の意義に該当するを Positivisme は実理主義なり、断じて「実證主義」にあらざるなり。」「「実理」の語、東西の学問思想歴達の史蹟に在りて、実に一大偉観

に居る　然るに　薄なる俗学者流、「実證」の一語に委し、之を斥けて顧みず、陋というべし。」としていた。[25]

「実理的方法」の内容は、コントの実証の六義（実在的、実用的、確定的、精密的、積極的、相対的）と対応して、「実理は、実在的なり虚無幻影を弄ばず、実用的なり無用好事に堕せず、確定的なり際限なき論議に淫せず、精密を尚び砂漠を避く、建設を期し破壊に僻せず、相対に安んじ口頭の絶対を斥く」として自らの用法に固執している。戸田貞三は「建部先生の思い出」のなかで「先生は個々の社会学の問題をとらえてこれを実證的に研究し、その成果を積み上げて行くというよりも、社会学論の体系の樹立に急がれた。それ故に先生の社会学研究は学論と観られるもの、学論を根拠とした政策論と観られるものは多いが、実證的研究と観られるものは少ない。この点に於いては外山先生の行き方とは可なり異なっている」[26]と評していた。

(iv)　建部の社会学は、「基礎的全般的研究」としての総合社会学の体系化の試みである。「普通・一般社会学」として、社会学序説、社会理学、社会静学、社会動学の構成は、いささか形式的ではあるが、見事である。しかし、この構想の根幹は、いかにも儒学思想にあり、書史的であり演繹的であり、教義・教学・教化・教政的であり規範主義的である。構成自体も、体系的ではあるが、極めて論理的形式的分類的分析的である。こうした特徴が、松本潤一郎の指摘した如く、建部の社会学を固定化させ「博士の整頓した体系的殿堂の前に、多数の初学者が萎縮し教義として博士の学説を受け入れる以外に出でなかったことは、社会学の発達を決して促進せしめるものでは無かった」[27]という一面があったといわなければならないだろう。

(v)　コント、スペンサー、ウォード等の社会学に倣いつつ、建部が「社会静学」と「社会動学」とを設定したことも特徴的である。社会静学は「社会の見在の説明」であり社会の発生・体制・運営を問う社会現象論であり、社会動学は「社会の運命の説明」であり「勢」と「理」に基づく社会進化論と社会理想論である。知行合一を求め実践しようとする儒学の伝統に沿うものであり、建部の学問姿勢と政治姿勢をよく示している。学者と政治家

との合一を求める儒学者の姿勢、時論家・経綸家の姿勢をもよく表している。

(vi) 独特の表現でもある「渾一体」としての社会観にささえられた建部の社会有機体説も建部社会学のもうひとつの特徴である。もちろん、社会有機体説そのものは建部の独創ではないが、「社会は有機体なり」「意識ある体なり」「人格ある体なり」「社会には体制あり」とし、更に社会運用論として「教化」や「政治」が重視され、社会理想論として社会本位主義、その政治的展開としての国家本位主義が強調され、そして、さまざまに噴出してきた社会問題の解決は、「大日本帝国の国体を基準とし、国是を実現するの不可避的手続きの一として」、「知行合一」を求める「帝国経綸」[28]を説くとき、国家社会有機体説の特徴を濃厚にしていくものであった。

建部のこうした国家・国体を基軸とする「渾一体」の社会観はすでに青年期の社会学構想の過程にみられたものであったが、日清・日露の戦争を体現し、『戦争論』（一九〇六年）を書き『普通社会学』（全四巻）を書き上げ、大正期に入って「日本社会学院」を組織主宰していった頃から国体・国是・皇道を中心にした国家主義、強国主義の国家社会有機体説の傾向が一層強められていったように思われる。「官本啓導より民本自由に進み、官本自由より国本協同に進む」という考えを一層強めていった。『国体国是及現時の思想問題』（一九二〇年）、『教政学』（一九二一年）、『国家社会観』（一九二一年）、『優生学と社会生活』（一九三一年）の著作もこの国家社会有機体説に支えられたものであった。

『国家社会観』では、「人的実在の最上究竟は、実に国社会其物なることを体得し、是に於て国社会を本位とする経綸思想、即ち人間思想の第三期、社会本位主義の具体なる国社会本位主義即ち之を約めて、国本主義と云う所のものが樹立せらるるに至るのである」。「社会実理の示命に依りて充実を遂げ、社会存立の適当堅実なる実現を致すの思想主義は、是即ち強国主義である」。「国是の策立は固より国体に基づかなければならぬ。国体の存立は、国社会存立の最上究竟の中枢要機である」[29]として、いよいよその国家社会有機体説を鮮明にしていったので

ある。

四、「日本社会学院」の主宰

建部遯吾は、一九〇一年東京帝国大学教授となり（三一歳）、社会学講座を担当して以来、一九二二年に社会学講座増設をめぐって辞任する迄二〇年余の間、東京帝国大学の社会学講座の中心的存在であったが、国家政治への強い関心と同様、我が国の社会学界の組織化やその政治的活動にも意欲を示した。

そうした現れのひとつが、建部遯吾編修『社会学論叢』（全六巻）（一九〇六―一九一二年）である。第一巻・建部遯吾『戦争論』（一九〇六年、金港堂、以下第五巻まで金港堂）、第二巻・小林照朗『日本之社会』（一九〇七年）、第三巻・江部惇夫『文明論』（一九〇九年）、第四巻・今井政吉『婦人と社会』（一九一一年）、第五巻・加地歌三郎『社会発達論』（一九一一年）、第六巻・今井政吉『社会本位と個人本位』（一九一二年、厳松堂）の六巻の叢書であった。著者たちはいずれも、建部の東京帝大の教え子であり彼等のそれぞれの卒業論文に手を入れて公刊したものと思われる。「社会学論叢叙」に「少壮有為の学者、余と共に斯道を玩うや、其造詣、往々世に問うに足る者あり、学博く、思精しく、立言の以て世道を裨補すべき者を選び、編して社会学論叢と作す」、「我日本の社会が実に自我実現の新時代期に入れるを表する所以」とある。建部の第一巻『戦争論』も明治三七・三八年の日露戦争中の建部の「東京帝国大学に於ける研鑽講述の小果」たるものであった。

(a) 「日本社会学院」の設立

「日本社会学院」は、今日の日本社会学会の前身とされる学会組織である。今日の「日本社会学会」は一九二四（大正一三）年に設立されたが、「日本社会学院」は東京帝国大学教授・建部遯吾が設立主宰し、京都帝国大学講師・米田庄太郎、その他が加わって一応全国的な学会組織として、一九一三（大正二）年五月に設立されたものである。全国的な学会組織の形をとってはいたが、東京帝国大学を中心に建部の主宰という点で、それまでの明治期の「社会学会」（一八九六―一八九八年）（明治二九―三一年）「社会学研究会」（一八九八―一九〇三年）（明治三一―三六年）とはやはり異なる特徴をもっていた。[30]

設立当初の「日本社会学院規則」（大正四年一二月現在）によると、「第一条　日本社会学院創立ノ目的ハ日本ニ於ケル社会学ノ研究ヲ奨メ業績ヲ顕スニ在リ学院ノ事業トシテ年報ヲ発刊シ集会ヲ開催ス」、「第二条　創立者ヲ継続シテ経営一切ノ責ニ任スル者ヲ幹事会トス幹事会ハ自個補充ニ因リテ恒久ニ存立ス」、「第三条　年報ノ発刊ニ従事シ之ニ署名スルモノヲ編修員トス編修員ハ学院之ヲ推薦ス」とあり、建部の主宰的性格の強いものであったといえる。

大正四年一二月現在の「正員及賛員名簿」によれば、会員は五一二名であり、社会学に関わる大学関係者、文科・法科学生等に限られず、文学・法学・経済学・医学・工学・理学などの大学関係者、弁護士、中学・師範学校等の教諭・校長、貴族院議員、衆議院議員、新聞記者、軍関係者、会社役員、銀行理事、官吏など、地方在住（建部と同郷の新潟県在住の会員が目につく）など、におよぶ広範囲な会員構成を特徴としていた。

(b) 雑誌『日本社会学院年報』の発刊

『日本社会学院年報』は、日本社会学院が組織された一九一三年の翌年に発刊され、第一年（大正三年）から

第一〇年（大正一二年）まで刊行された。創刊号（第一年）の「叙」を建部遯吾が記し、「社会渾一体の実理的研究は、世界学壇の帰趨、而して人文改新の要材なり。夫の個人本位観と称する者、洋東の鄰邦を以てするも、亦今に於て実に其弊に堪へず、神学的独断、形而上学的弁証、談毎に清らして事往々汚、論愈愈高うして理益々迂」として、次のように述べていた。

社会学の今に於いて大に興れる、之を外にしては世界の斯気運の果実たり、之を内にしては国本の斯活材の要求なり。欧西列国の学壇、事に斯学に従う者の全国的団体を有するもの無数、往々亦翼賛を境外に求めて、切し且つ磋す、外山故名誉教授、加藤老名誉教授以来我国亦斯学の学習あるや久し、今や門人相謀り聊か志を斯学に同じうするものを糾合して、日本社会学院と作し、涓埃を国運に効し、一粟を人文寄せむとす。然りと雖も斯学の研究、其法や多趣、其事や多端、而して亡羊を免れ津涯を窮むる、唯実理に頼らむか、吁、唯実理に由るべし。年報の発刊に臨み、此を叙して以て巻頭に題す。（建部遯吾）

年報の発刊は「一〇月、一二月、二月、四月、六月ヲ以テ期ト為シ一年大約六〇〇頁」とあるように、合冊して大部な『年報』を第一年（大正三年合冊）から第一〇年（大正一二年合冊）まで継続し計一〇冊（合冊）を刊行している。編修員は「東京帝国大学教授・文学博士　建部遯吾、京都帝国大学講師　米田庄太郎」、幹事会は「文学士・今井時郎、同・今井政吉、同・葛西亦次郎、同・丸山篤、同・安富成中」の諸氏であった。第九年までは編修員も建部、米田で変化はなかったが、幹事会員は戸田貞三や赤神良譲が入ったり少々異動があった。だが、第一〇年の『年報』では、建部の東京帝国大学の依願免官もあり、編修員は「文学博士・建部遯吾、京都帝国大学教授文学博士・米田庄太郎、東京商科大学教授文学博士・高田保馬、東京帝国大学助教授・今井時郎」と変わっていた。

建部は、この年報の編修においても主宰し中心的な活動を果たしていたと思われるが、論文・「説林」として

執筆しているものは意外と少ない。「宗教に対する実理政策」（第二年）、「思想動揺問題解決法」（同）、「東洋の大勢と青島の運命」（同）、「帝国教育の根本方針について」（第四年）、「国語に対する実理政策」（第五年）、「一　二の社会学的根本概念に就て――実理観、進化論、渾一観」（第七年）、「美術政策綱領」（第八年）、「神社行政の原理」（同）などであり、しかもそれらの殆どが教化や教育をめぐる政策論・実践論であった。実に数多くの「彙報」（時報）（批評紹介）を書いているのも驚異的である。「一　二の社会学的根本概念に就て」の論は、彼の『普通社会学』（全四巻）が完成刊行されてから二年程しての講演であるところからして基本的な考えは殆ど変化がないが、「社会渾一観」が一層強められているようにも感じられる。

「日本社会学院」の年々の大会が第一大会より第一〇大会まで開催されたが、第一大会（大正三年三月）・「婦人労働問題」、第二大会（大正三年一一月）・「国民思想動揺の原因」、第三大会（大正四年）・「人口問題」、第四大会（大正五年）・「戦後教育の根本方針」、第五大会（大正六年）・「人種競争」、第六大会（大正七年）・「戦争と文化」、第七大会（大正八年）・「国民保健問題」、第八大会（大正九年）・「教政問題」、第九大会（大正一〇年）・「内地植民問題」、第一〇大会（大正一一年）・「農村社会問題」を取り上げて大会が開催されていた。

この『日本社会学院年報』は、一九二四（大正一三）年五月に下出隼吉、藤原勘治、林恵海、今井時郎、戸田貞三、松本潤一郎などの東大を中心とした若い研究者・学者の斡旋で新たに創立された「日本社会学会」とその機関雑誌『社会学雑誌』が発刊されていったこともあって、第一〇年（大正一二年）を最後に刊行されなかった。しかし、その後、日本社会学院の名で刊行されたのは『社会学研究』（日本社会学院編、日本社会学院年報第一一年と明記）（第一巻一号）であり、第一巻二・三・四号、第二巻一号の計五冊（一九二五年四月より一九二七年三月）まで続いた。[31] この『社会学研究』は学史研究においても殆ど取り上げられることはなかったが、表紙には『日本社会学院年報』の表紙のスタイルと似て、「文学博士・米田庄太郎、文学博士文学士・高田保馬、法学士文学

士・赤神良譲・編修」と記してある。したがって、この時期の社会学界においては、一方で日本社会学院の『社会学研究』が建部の門下赤神良譲が中心になって続刊され、他方では当時新たに設立された日本社会学会の『社会学雑誌』が発行されるという状態が短期ながら続いたのであった。社会学界における学問運動・活動をめぐる新・旧の葛藤が潜在し顕在化していったといえる。建部と建部社会学の勢力が大きかっただけに、建部や建部社会学に対する若い研究者・学者の批判も痛烈なものがあったとも考えられる。

(c) 『現代社会問題研究』叢書の刊行

日本社会学院大会における年大会の研究報告題目が「婦人労働問題」、「国民思想動揺の原因」、「人口問題」、「戦後教育の根本方針」、「人種競争」、「戦争と文化」、「国民保健問題」、「教政問題」、「内地植民問題」、「農村社会問題」であったことは先に触れたとおりであるが、大正五年三月に「会員内藤久寛君より本学院基金として金五百円及び本学院研究事業費として向後三ケ年に亙り年額三百円以内の寄付申出」があり、日本社会学院のなかに「調査部」と「基金部」を設置して、大会活動等と並行して「調査部」活動を進めていくことになった。内藤久寛は、建部と同じく新潟県の出身で新潟県の県会議員を経て、日本石油有限会社を設立し社長となり衆議院議員でもあった（内藤久寛『春風秋雨録』一九五七年）。

このようにして「今次第一回研究事項として内藤久寛氏の出題「帝国教育の根本方針」を考査採択」し、「調査部第二回の研究調査題目は、会員内藤久寛君中野鉄平君の提出に係わる「帝国の国運に対する仏教の職能」と決定」し、第三回は「階級問題」、第四回はやがて叢書として刊行されていく「現代社会問題研究」、第五回は「中等教育の学科課程に社会学を課するの議」、第六回は「社会学教科書編修」（これは日本社会学院調査部編纂『社会学教科書』同文館、大正一一年として発刊されている）という調査事項を設定して六回にわたる研究調査事業

を試みた。『現代社会問題研究』叢書（全二五巻）は「調査部」の第四回研究調査活動の産物であった。ここでも、建部の組織力、政治力、主宰力が大いに発揮されている。

「凡そ大日本帝国の国体を基準とし、国是を実現するの不可避的手段の一としての社会問題解決は、此渾一的態度、実理的方法に由るの外あるべきではない」[32]として、第一巻・現代社会文明、第二巻・貧窮、第三巻・労働者問題、第四巻・現代都市の問題、第五巻・農村問題、第六巻・食糧問題、第七巻・私有財産問題、第八巻・本邦社会事業、第九巻・犯罪問題、第一〇巻・革命及宣伝、第一一巻・風俗問題、第一二巻・婦人問題、第一三巻・人口問題、第一四巻・国民保健問題、第一五巻・人種問題、第一六巻・植民問題、第一七巻・平和問題、第一八巻・国防上の社会問題、第一九巻・政治問題、第二〇巻・階級問題、第二一巻・家族制問題、第二二巻・宗教問題、第二三巻・思想問題、第二四巻・国家社会観、第二五巻・補遺及総索引からなる膨大なものであった。

出版刊行は当初大正九年七月より一〇年七月に至る期間を予定していたが、実際には第六巻・農村問題（大正九年七月）、第二巻・貧窮（大正九年八月）、第九巻・犯罪問題（大正九年八月）を手始めにして、最終巻の第二五巻・現代社会問題研究・総索引が刊行されたのは予定よりかなり遅れて昭和二年一一月であった。約七年を費やしたことになる。その間に、本論の執筆者もかなり入れ替わり、建部も東京帝国大学教授を辞任したり新潟県第六区で立候補して衆議院議員となったりと多忙であったにもかかわらず、当初の第一巻・現代社会文明、第二四巻・国家社会観に加えて第六巻・食糧問題、第一七巻・平和問題、第一九巻・政治改革（書名が少し変更された）、第二二巻・宗教問題と計六巻の本論の執筆を引き受けて叢書を完成させている。建部の「社会という渾一体の病気煩悶、それがさまざまの方面に併発させる」現代各種の社会問題解決に向い、この叢書を根気よく完成させようとする強い意欲と執念をも感じさせる。[33]

このようにみてくると、近代日本社会学の展開過程のなかで建部遯吾が果たした役割は、意外と大きく、特に

前節で言及した(i)全四巻に及ぶ『普通社会学』の公刊によって総合社会学の立場から近代日本で初めて一般社会学を体系化する先駆的な業績を残したこと、そしてこの節で触れてきたように(ii)建部は限定されたものであったが、全国的な学会組織としての「日本社会学院」を組織・主宰して機関雑誌『日本社会学院年報』を発刊し、加えて「調査部」を設置して『現代社会問題研究』叢書（全二五巻）を完成刊行させた活動、の事実は適切に評価されるべきであろう。これらの点はこれまでの日本社会学史研究においては充分に評価されてこなかったように思われる。

「建部社会学は官辺に安心感を与え、ひいては一般に社会学への圧迫を脱せしめた」という点で、建部の個人的な功績が無かったとはいわないが、社会学という学問が次第に研究・教育機関としての大学や大学部にも設置され制度化されて受け入れられ講壇化していくにつれて社会学という学問活動自体が保守的傾向をもっていったというべきではなかろうか。大正期に入り個人主義やデモクラシーがいわれ、昭和期に入って社会科学や史的唯物論、マルクス主義への関心が一時的に強められたとしても、大学を中心とした学問活動はそうした保守的性格を担い担わせられたといえる。この点では、建部社会学がもつ保守的な特徴と講壇化していく社会学の学問活動自体の保守化傾向は、大正期以降も、昭和戦中期を通じて持続した性格といえるのではなかろうか。

五、むすび

これまでの近代日本社会学史研究の中では、建部遯吾の社会学について「彼の社会学は大正期に至ってはすでに過去のものとなり」（福武）、「その学問構成は科学的厳密さを欠き、間々哲学的思弁に堕するものを含んでいた」、「学問的にこれが社会学の発展に寄与することなく」（新明）、「建部は明治後期の明治憲法体制とナショナリ

ズムの時代を背景にして日本主義・東洋主義の立場をとった」（富永）等の評価が多くなされてきた。いづれも正鵠を射た批判といえるが、こうした批判がひとり建部社会学にのみ向けられる批判であったろうか。確かに個々に社会学者の業績や時々の時代的な格闘、試みをみると、これから言及しようとする傾向が当てはまらない事も多いが、昭和終戦時までのより長期的な展開として跡づけるときにそこに重なり合う根強い近代日本社会学の歩みの特徴が底流としてあったのではなかろうか。

わたしは本論の第三節で建部社会学の特徴を要約したが、それらに照らせば近代日本社会学の歩みの特徴として、我が国の歴史的な経緯もあって(i)儒学思想、支那哲学思想に依拠したり影響を受けた社会学の試みや体系化の傾向は根強く存続し続けたこと、(ii)近代日本の激動に直面して日本の歴史的な命運についての痛烈な危機意識や列強帝国との強い競争意識をもっていたこと、(iii)コントの positif, positivisme をめぐっての「実証的」、「実証主義」に対する建部の「実理的」、「実理主義」への頑なな固執があったとしても、昭和終戦時までの我が国の社会学における実証的研究、経験的研究はいくつかのすぐれた業績が残されているけれども、それらが根付いて持続されなかったこと、多くは学論的で講壇的であったこと、(iv)明治期以降は欧米の社会学の影響も強く翻訳書も数多く、書史的であり演繹的であり、その限りで権威主義的であり、「かくあるべし」として規範主義的であり、教義・教学・教化・教政・教養的な傾向を多分にもっていたこと、そして、(v)建部の場合には知行合一の考えにあまりにも強く支えられていたが、日本の歴史的な「危機」「非常時」状況の動きのなかでは学問姿勢と政治姿勢との境界が極めて曖昧となり相互に禁欲の度を弱めていったこと、更に(vi)個人主義思想や関係論的視点が胚胎していったとしても、社会有機体説や国家社会有機体説、国家本位主義や集団主義、民族主義的思考がかなり根強かったこと、「社会」は多くは国家社会として論じられ、生活する人々の「世間」や「世の中」、「市民社会」、日常生活には部分的にしか眼が向けられなかったこと、などがそうした歩みの特徴である。

このように捉え直してみると、建部社会学のもつ特徴と昭和終戦時までの日本社会学の大きな性格はかなり重なり合うものが多いのではなかろうか。総合社会学から個別特殊社会学へ、形式社会学や文化社会学、社会科学やマルクス主義など短期には歴史的な展開の特徴を確実に跡づけることは大切なことである。しかし、同時に近代日本社会学史におけるより長期的な展開を跡づける試みは、建部への個人的人物に向けての批判・攻撃と建部社会学とその後の社会学とを区別しようとするあまりに、戦前期の学史研究においても、戦後期の学史研究においてもこうした長期的な視点からの研究が深められずに来たといえる。

昭和期に入ると、経済恐慌や大量の失業者を出し社会不安が増大していくなかで、日中戦争、太平洋戦争と戦線がますます拡大し国家総動員体制が敷かれ戦時体制に突入していくと、日本社会学会の活動もそうした国家体制、戦時体制のもとで転回していくことになる。日本社会学会の機関誌『社会学雑誌』はその後一九三一年に『季刊社会学』と改題され、さらに一九三三年に『年報社会学』へと変転していた。その「発刊の辞」に「いまや外、社会学はその危機或いは転向の機にあり、これと相伴って内、学会は明るき白昼の光に向かってその窓を開け放たなければならぬ。然も学会機関誌を取り巻くこの内外の情況的変化は、事実同一の歴史的必然性のもとに立っている」としていた。

『年報社会学』（第八輯）（一九四一年）には、東京帝国大学で開催された「日本社会学会紀元二千六百年記念臨時大会」（一九四〇年一〇月二六・二七日）の公開講演や研究報告の内容が掲載されている。建部遯吾「社会学講座の創成」、米田庄太郎「我国社会学者の今日の急務」、遠藤隆吉「社会学の学的及び社会的実現」、高田保馬「「社会学原理」の前後」、戸田貞三「日本社会学会を中心に」がその時の講演であった。建部は、**図表2**に示された彼の自説持論の「人間思想開展の常徑」に従って、外山正一、建部と連なる社会学の歩みを思想開展第一、二、三期への躍進転進と説き、学制改革や新体制における新秩序の必要を論じている。

米田は「我国社会学者の今日の急務」として、第一に「今日我々の大の力を注ぐ可くは日本民族を中心として東亜諸民族の社会的文化的発達を其の方面に於て詳しく研究して、大東亜共栄圏の建設及新体制の確立の為に有益な又必要な社会学的知識或いは資料を提供することである」。次に、「日本社会哲学の建設である。……日本社会哲学は実に日本国民の指導原理を哲学的に確立するものとして……されば私は新しき日本社会哲学の先駆者として建部博士の社会学、建部社会学が今日の時勢の光に照らして改めて検討され、その真価が汎く一般に承認されることを切望」すると論じている。高田はその中で全体主義と自由主義、個人主義との関係を論じて、全体主義的な動きが「将来に亙っての世界永遠の大勢であると考える方がありましたならば、是は極めて近視眼的な見方である」として、ハバート・スペンサーの見方について「今頃スペンサァを引き出すことについてはいろいろ異見もありましょう。しかし或る時代の卓越せる学者には新旧をこえたる価値あるものが」あり、「国家の将来の大勢の見透しをつける上に於ては社会学の知識が十分に活用されなければならないと信じております。」と講演していた。

図表2

五相＼三期	第一期	第二期	第三期
思想開展の根本方式	所動	解放	能動
思想運用の方式	模倣・獨斷	懷疑	批判
思想運用の機關	神怪・迷信	空理・推測	實理
社會生活の根本思想	物體本位	個人本位	社會本位
政治生活の根本思想	官本啓導	民本自由	國本協同
五相＼三段	未開思想	半開思想	開明思想

（建部遜吾「社会学講座の創成」日本社会学会『年報社会学』第八輯、一九四一年、三頁）

しかし、戦線がますます拡大され戦局が深まり、産業も政治も教育も、国民生活も娯楽や芸術も、学問姿勢や政治姿勢も戦時動員体制のなかに組み込まれていった。半ば組み込まれ、半ばそれを支え実践していった。社会学における学問活動も決して例外ではなかった。建部の門下、戸田貞三は「日本社会学院」の後の「日本社会学会」の中心で活躍し、第一回国勢調査の統計資料等を活用して家族の集団的特質を解明しようと

した『家族構成』（一九三七年）や『社会調査』（一九三三年）などを著して日本社会学界に実証的研究の試みを切り開いてきたが、やがて『家の道』（一九四二年）、『家と家族制度』（一九四四年）を執筆して、「この「家」の生活を向上発展せしめることによって、長期線に不可欠である戦力増強に資することも出来、又戦後に生ずる惧のある思想動揺を或る程度防止することも出来る」[34]としていた。

かって建部社会学をして「研究の発達に対して決して良好の結果を斉すものではあり得なかった」と批判していた松本潤一郎は、『集団社会学原理』（一九三七年）、『文化社会学原理』（一九三八年）などの著書を通じて「総社会学」の立場からの社会学の体系化の構想を展開していたが、戦時下で戦局が激しくなっていくとともに、「大東亜社会の建設という国家的大使命に直面している我国現下の状勢において、社会学の喜ばしい積極的翼賛の期待せられることは勿論であろうと思う」[35]として、また「社会理論の健全な育成に努め、これを今後の国家・民族生活の営為のために活用すべき方策に徹しなければならぬ。社会理論の発生と発展の根本的意義の如きもまたひとしくそれを帰着点たらしめているのである。」「反国家的不健全な社会理論は論外であるが、今後の健康な社会理論が国家翼賛性にその真面目を発揮すべきであることが、それからいえる」[36]として、『社会理論』（一九四二年）、『戦時社会文化』（一九四三年）や『国家と社会理論』（一九四三年）などを著すに至っていた。

このようにして日本社会、「東亜広域社会」「大東亜共栄圏」をめぐる社会学の課題として国家、国体、戦争、日本主義、家族・家、人種、民族、職業、宣伝、共同体、「非常時」等々の問題が急速に取り上げられるようになっていった。新明正道『人種と社会』（一九四〇年）『東亜協同体の理想』（一九三九年）『民族社会学の構想』（一九四二年）、高田保馬『東亜民族論』（一九三九年）『民族論』（一九四二年）『民族耐乏』（一九四二年）、小松堅太郎『民族と文化』（一九三九年）『新民族主義論』（一九四〇年）『民族の理論』（一九四一年）、加田哲二『人種・民族・戦争』（一九三八年）『戦争本質論』（一九四二年）、布川孫市『戦争の科学的研究』（一九四一年）、岡村重夫『戦争社会学研

究』（一九四三年）、小山栄三『民族と人口の理論』（一九四一年）『戦時宣伝論』（一九四二年）、米山桂三『思想闘争と宣伝』（一九四三年）、尾高邦雄『海南島黎族の経済組織』（一九四四年）『職業観の変革』（一九四四年）、河合弘道『日本社会学原理』（一九四三年）、関栄吉『国体と全体主義』（一九四三年）なども戦時体制下における社会学の学問活動の一端を示すものであった。

本論で試みてきたように、建部遜吾の社会学構想を軸に近代日本社会学の歩みを再検討すると、建部社会学に内包された特徴は、「彼（建部）の社会学は大正期に至ってはすでに過去のもの」とはいえなかったのではないか、「その学問構成は科学的厳密性を欠き、間々哲学的思弁性に堕するもの」はひとり建部のみではなかったのではないか、「日本主義・東洋主義の立場」はひとり建部だけではなかったのではないか、と考える。むしろ、建部社会学の特徴は、昭和終戦時までの近代日本社会学のひとつの底流であつたと位置づけることができるのでないだろうか。建部社会学とその後の展開を的確に把握しなければならないことは確かであるけれども、建部社会学に示された特徴は、終戦前期までの近代日本社会学のひとつの大きな底流として持続した流れとしてあったこと、近代日本の社会学が内外に危機意識を深め国家主義、戦争や軍国主義、民族主義、侵略主義、日本主義や東洋文明主義、事大主義、同調主義などの諸特徴を内包させていたことに眼を向けなければならないだろう。これまでの学史研究においては以前の研究や評価をあまり再検討することなしにそのまま引き継いでよしとしてきた傾向が強い。

建部社会学を広く社会学史上に位置づけるならば、パースペクティブからすれば、(i) micro-level, meso-level, macro-level, global-level のうち、macrosociology 巨視的な総合社会学、(ii) R・コリンズのいう「四つの社会学上の伝統」に照らせば[37]、紛争理論、デュルケム理論、ミクロ相互作用論、功利主義・合理的選択理論のうち、デュルケム理論の枠に近く社会（国家）有機体論・機能主義的であり、(iii) 実証的・経験的方法論に関しては deduction,

induction, abduction のうち、deduction で「理法」「理」「勢」などといい演繹法的であり、(iv)歴史的な観点からすれば、pre-modern, modern, post-modern のうち pre-modern から modern への流れの社会学構想であったといえる。

このように広く社会学上のパースペクティブの展開を再考察するなら、近代日本社会学の歩みの中で建部社会学の歩みはひとつの歩み、底流であり、他の歩みや他の底流を掘り起こすことも可能である。武田良三がかって「わが国における市民社会の形成と社会学」という論文の中で「福沢が……一個の独自の社会学者であったこと」、「福沢の「人間交際の論」とはまごう方なく一個の社会学を意味していたのである」[38]としていた。蔵内数太が『社会学　増補版』（一九六六年）で「彼（福沢）は社会学の学論はしなかったが、社会学を実践したというべきであろう」[39]と述べていた。建部社会学やA・コントの社会学の底流とは異なる、H・スペンサーの社会学や福沢諭吉などにみられた個人主義、自由主義や実証的経験的方法の立場に連なる近代日本社会学のもうひとつの歩み、底流を掘り起こし再考察していく作業がわたしにとっての次の課題となる。戦中期における社会学の活動の足跡をもっと丹念に跡づける作業も、日本の社会科学史、社会学史のなかで看過できない、いまだに重要な課題である。

（1）川合隆男「日本の社会学史と社会調査史」有末賢・霜野寿亮・関根政美編『社会学入門』弘文堂、一九九六年、二四六―二四九頁

（2）蔵内数太「日本における社会学の成立」『社会学　増補版』所収、培風館、一九六六年、川合「日本の社会学史と社会調査史」前出、二四七―二四八頁

（3）高田保馬「日本に於ける社会学の発達」『（岩波講座）教育科学』第一八冊、一九三三年

（4）福武直「日本社会学」阿閉吉男・内藤莞爾編『社会学史概論』勁草書房、一九五七年

(5) 松本潤一郎「日本社会学の沿革と展望」松本編『社会学――学説と展望』浅野書店、一九三二年
(6) 同、一三頁
(7) 『東京大学文学部社会学科沿革七十五年概観』一九五四年、二八―三一頁、林恵海「日本社会学の発展」日本社会学会編『教養講座　社会学』（改訂増補版）有斐閣、一九五七年、三一五頁
(8) 福武直、前出、四五八頁、新明正道『社会学史概説』岩波全書、一九五四年・一九七七年改訂、一三九―一四〇頁
(9) 富永健一『社会学講義』中公新書、一九九五年、二七六―二七八頁
(10) 秋元律郎『日本社会学史――形成過程と思想構造』早稲田大学出版部、一九七九年、河村望『日本社会学史研究（上・下）』人間の科学社、一九七三・一九七五年、斉藤正二『日本社会学成立史の研究』福村出版、一九七六年、大道安次郎『日本社会学の源流――九人の開拓者たち』ミネルヴァ書房、一九六八年
(11) 建部遯吾編輯『藏軒存稿』自刊、一九三五年、三頁
(12) 川合隆男「高木正義の社会学模索」『法学研究』第六八巻九号、一九九五年九月、を参照されたい。
(13) 川合「建部遯吾」川合・竹村英樹編『近代日本社会学者小伝』勁草書房、一九九八年、一三五―一四一頁。そこに建部の略年譜、略伝、著作目録、研究参考書誌等が記されているので、詳しくはその著作目録を参照されたい。最近の研究論文として田野崎昭夫「日本の講壇社会学の確立期をめぐる若干の考察」『社会学科紀要』（中央大学文学部）第七号、通巻一六九号、一九九七年九月
(14) 建部遯吾『陸象山』哲学書院、一八九七年、二四頁
(15) 同書、七三―七四頁
(16) 同書、八五頁
(17) 同書、一二三頁
(18) 建部遯吾『哲学大観』金港堂、一八九八年、三六九頁
(19) 同書、建部は「オオギュスト・コムト」の思想界における二つの功績に言及したなかで、「其積極哲学の全系」という名称を用いていた。一〇五―一〇七頁、三六八頁を参照。
(20) 建部遯吾『静観余録』金尾文淵堂、一九〇七年、一四二頁、二四九頁

(21) 建部遯吾『西遊漫筆』有朋館、一九〇二年
(22) 建部遯吾『普通社会学・第一巻・社会学序説』金港堂、一九〇四年、「叙言」一―二頁
(23) 同書、五九―六三頁
(24) 大町桂月「学生演説会傍聴の記」大町桂月『筆草』、森銑三編『大正人物逸話辞典』東京堂出版、一九六六年、二三五頁
(25) 建部遯吾『普通社会学・第四巻・社会動学』金港堂、一九一八年、一八三―一八七頁
(26) 戸田貞三「建部先生の思い出」日本社会学会編『社会学研究』第一集、一九四八年、一一七頁
(27) 松本潤一郎、前出、一三頁
(28) 建部遯吾『現代社会文明』（『現代社会問題研究』叢書・第一巻）、冬夏社、一九二〇年、八頁
(29) 建部遯吾『国家社会観』（『現代社会問題研究』叢書・第二四巻）、冬夏社、一九二一年、八七頁、一二五頁、二四五頁
(30) 川合隆男「解題『社会雑誌』『社会』『社会学雑誌』」（『明治期社会学関係資料』全一〇巻・解題）龍渓書舎、一九九一年、川合「近代日本社会学史研究と布川孫市の社会学」『法学研究』第六六巻三号、一九九三年三月、川合「解題・日本社会学院と『現代社会問題研究』叢書」（『現代社会問題研究』叢書、全二五巻、第二五巻）一九九三年
(31) 『日本社会学院年報』『社会学研究』の雑誌記事目録については、川合編『近代日本社会学関係雑誌記事目録』龍渓書舎、一九九七年を参照のこと。
(32) 建部『現代文明社会』前出、六―七頁
(33) 同書、七頁。『現代社会問題研究』叢書・全二五巻の刊行は、予定よりかなり遅れて一九二〇（大正九）年七月より一九二七（昭和二）一一月までに刊行された。この間に、建部は一九二二年六月に東京帝国大学の辞任願書を提出、同年九月に依願免本官となり、一九二三年一二月に新潟県第六区で衆議院議員に当選、一九二七年には帝国議会代議員として万国議院聯合第二四大会（フランス・パリ）に出席、同年一一月叙勲二等賜瑞宝章を授与されている。また、東京高等商科大学等でも講師をも務めていた。一九三八年一二月には勅撰で貴族院議員に任命され、日増しに敗色の濃い戦渦の一九四五年二月一八日に東京千駄ケ谷の自宅で逝去、七五年の生涯を閉じた。遺骨は郷里の横越村宮原の建部家の墓地に納められた。人生としての彼の足跡を見るときに、若き時にすでに「人生は学問の連続なり、人生は

事業の連続なり。」「学問や事業や凡て是れ人生の有らむ限り継続する者なるを覚悟せざるべからず。」「政治家とは何ぞや、天下国家を経営する事に当たるの人物の謂に非ずや。学者とは何ぞや、天下国家を経営するの道を講ずる人物の謂に非ずや」としていた建部の持続した強い信念、意欲、執念をも感じさせる。（『静観余録』前出、一五七頁、二五三頁）

(34) 戸田貞三『家と家族制度』羽田書店、一九四四年、「はしがき」一頁

(35) 松本潤一郎『戦時社会文化』積善館、一九四三年、三四二頁

(36) 松本潤一郎『国家と社会理論』河出書房、一九四三年、「序」二頁

(37) Randall Collins, Four Sociological Traditions, Oxford Univ. Press, 1994, ランドル・コリンズ著『社会学の歴史』有斐閣、一九九七年

(38) 武田良三「わが国における市民社会の形成と社会学」早稲田大学七五周年記念出版社会科学部門編集委員会編『近代日本の社会科学と早稲田大学』一九五七年、三七六頁、武田良三「日本の市民的社会と社会学」武田『産業社会の展開と市民社会』弘文堂、一九六四年を参照のこと。

(39) 蔵内数太『社会学　増補版』培風館、一九六六年、八一―八三頁

附記　今回の論文「建部遯吾の社会学構想」を書くにあたっては、これ迄に平成六年度慶應義塾大学学事振興資金による研究補助（「明治期における建部遯吾の社会学思想の形成」）、平成六―七年度文部省科学研究費補助（一般研究C「「日本社会学院」の活動と建部遯吾」）をうけたことを、ここに記して感謝する次第である。（一九九九年一月）